

連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 19 回

木の実いろいろ (1)



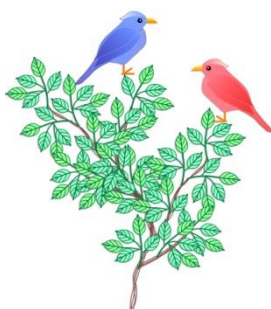
本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(19) 木の実いろいろ (1)

植物が人の目を楽しませてくれるのは、花が第一ですが、それに続く実（果実）もまた、色やかたちの美しいもの、おもしろいものが少なくありません。

赤い鳥 小鳥
なぜなぜ赤い
赤い実を食べた



白い鳥 小鳥
なぜなぜ白い
白い実を食べた



青い鳥 小鳥
なぜなぜ青い
青い実を食べた

(北原白秋作詞・成田為三作曲)

事実ではないけれど、そんな印象を与える、美しく色づいた実は、秋から初冬へ季節を彩る風物です。

今回より何回か、みずき野周辺で見られる木の実や草の実について述べてみたいと思います。

(1) ガマズミ

ガマズミは東アジア温帯に原産する植物で、みずき野周辺にも林のへりなどによく見られる低木です。5～6月に広い緑の葉の上に群がり咲く白い花も、8月から秋にかけて赤く熟する実も美しい。また、熟した実は甘酸っぱく、ちょっとつまんで味わうのも散歩中の楽しみの一つです。ガマズミの実は、果実酒にも利用されるようです。

ガマズミは標準和名ですが、この植物の呼び方は地方によって多種多様です。私は父からソゾメと教わりました。父の出身地である千葉県では、ソゾメまたはソゾミとよぶようです。



ガマズミの花
5月下旬
本町地区



ガマズミの実
10月上旬
本町地区

(2) クサギ

クサギは東アジアの温帯から亜熱帯に原産する小高木で、葉に触ると異様な臭いがすることで、日本ではクサギ（臭木）と名付けられています。しかし花や実はとても美しい植物です。花は8～9月頃に咲き、実は秋に熟します。



クサギの花
8月上旬
本町地区



クサギの実
10月上旬
本町地区

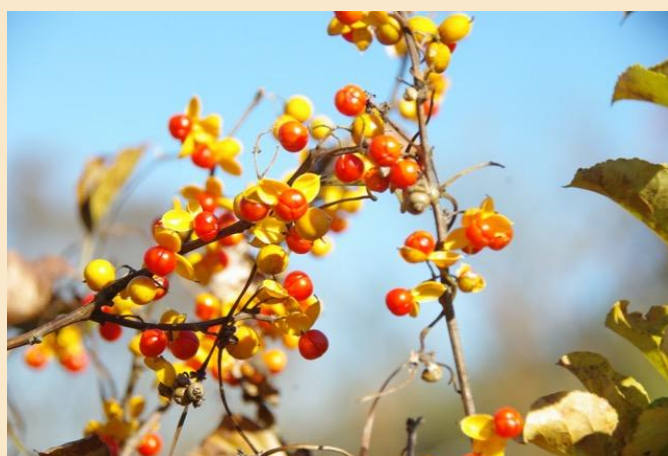
(3) ツルウメモドキ

東アジア温帯に原産するつる性の植物で、花は5～6月に咲き、雄株と雌株があります。実は初冬までに成熟し、外側の皮（果皮）が開きます。中から現れる朱色の小球は実ではなくて種子です。

みずき野には第2調整池の東側のフェンスや8丁目東側隣接地に見られます。ただし、ツルウメモドキは庭木や生け花の材料として使われますので、乱獲されないよう、願っています。



ツルウメモドキの花
5月中旬
第2調整池
上：雄花
下：雌花



ツルウメモドキの実
11月下旬
第2調整池

ムラサキシキブとは、誰が名付けた和名なのでしょう。いうまでもなく、源氏物語の作者紫式部になぞらえられた幸運な植物です。実際、ムラサキシキブの実の色は高貴な紫色です。その色は、紫式部とともに源氏物語のヒロイン、紫の上をも表すように思われます。しかし植物のムラサキシキブはもちろん宮廷ではなく、日本各地の山野に広く自生する植物です。みずき野にも林のへりなどによく見かけます。

ムラサキシキブは東アジア温帯に分布し、日本では花は6～7月に咲きます。あまり目立ちませんが、近づいて見ると、やはり美しい紫色です。実は晩秋から初冬に色づきます。写真は落葉前に写したのですが、葉が落ちてしまった後も、紫の実が際立って美しく見えます。



ムラサキシキブの花

6月中旬

本町地区



ムラサキシキブの実

11月下旬

貝塚地区

コムラサキは東アジア温帯～亜熱帯に産します。ムラサキシキブの仲間ですが、日本ではムラサキシキブとは異なり、野生しているものは少なく、ほとんどが公園や庭に栽培されています。ムラサキシキブは3メートルほどの低木ですが、コムラサキはさらに小さく、2メートルほど。ムラサキシキブを紫式部になぞらえるならば、コムラサキは紫式部の娘・大式三位または和泉式部の娘・小式部内侍というところでしょうか。



コムラサキの実
9月中旬
さくらの杜公園

コムラサキの中に白い実をつけるものがあり、シロミノコムラサキとよんでいます。やはり主として栽培されているものですが、写真の植物は自生しているようでした。どこかの庭から小鳥が運んできて落とした種子が発芽して成長したのかもしれませんが。



シロミノコムラサキの実
10月中旬
3丁目東隣接地

(5) マンリョウとヤブコウジ

赤い実をつけるセンリョウとマンリョウは正月の縁起物として床の間に飾られます。また私自身は見たことがありませんが、この両植物と、やはり赤い実をつけるアリドウシという植物を寄せ植えにしたものを「千両万両有り通し」と称して縁起物とすることもあるようです。

しかしセンリョウはセンリョウ科、マンリョウはヤブコウジ科に属し、互いに縁遠い植物です。

センリョウは中国原産で、日本では鑑賞用の植物として栽培されます。山野に自生

しているものは見たことがありません。一方マンリョウは日本各地の林下に多く見られる植物で、東アジアの温帯や亜熱帯にも分布しています。

ヤブコウジは日本をはじめ、東アジアの温帯・亜熱帯に産します。日本ではマンリョウと同じように林下に普通に見られます。マンリョウは高さ50センチから1メートル位で実もたくさん成りますが、ヤブコウジは高さ10～30センチほどで、実も2～3個つけるだけです。そのせいか、千両、万両に比し、ヤブコウジは十両とされています。でも私はこの控えめで小さな植物に特別な親しさを感じています。



マンリョウの実
12月下旬
文化財公園



ヤブコウジの実
12月中旬
本町地区

ヤブコウジは、古代からよく知られた植物で、万葉の時代には「やまたちばな」とよばれていました。

大伴家持の歌2首。

この雪の 消残（けのこ）る時に いざ行かな
山橘（やまたちばな）の 実の照るも見お
万葉集（4226）

け残りの 雪にあへ照る あしひきの
山橘を 苞（つと）に摘み来（こ）な
万葉集（4471）

（「苞に」は「土産に」の意。

「山橘を土産に摘みに行ってこよう」ということ。）



(6) アオキ

アオキは北海道から沖縄まで野生する日本特産の植物です。雌株と雄株があり、花は3～5月に咲きます。実は初冬から冬にかけて色づき始めます。アオキは林内に多く自生し、また庭などに栽培されます。葉に黄色の斑の入ったものもよく見られます。冬の散策にはとりわけ目につく植物です。

雪降りし 日も幾度よ 青木の実

中村汀女



アオキの花 4月中旬 本町地区
上：雄花 下：雌花



アオキの実
2月下旬
本町地区



2015 年 12 月
本吉 総男